



## 中近世の蝦夷地と北方交易 アイヌ文化と内国化

著者	関根 達人
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301乙第9282号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/61413">http://hdl.handle.net/10097/61413</a>

# 関根達人『中近世の蝦夷地と北方交易—アイヌ文化と内国化—』要約

## 〈目次〉

### 序章 北方史とアイヌ文化

1. はじめに
2. 問題の所在
3. 本書の構成

### 第Ⅰ章 北方交易に関する考古学的研究

1. アイヌ文化成立以前の北方交易—北日本出土の鉦をめぐって—
2. 考古資料からみたアイヌ文化の成立
3. アイヌの宝物とツクナイ
4. 副葬品からみたアイヌ文化の変容
5. シベチャリ出土の遺物
6. タマサイ・ガラス玉に関する基礎的研究

### 第Ⅱ章 本州アイヌの実像

1. 考古学的痕跡
2. 生業・習俗と北奥社会
3. 狩猟と漁撈

### 第Ⅲ章 和人の北方進出と蝦夷地の内国化

1. 道南和人館とその時代
2. 北海道島における中世陶磁器の流通
3. 近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化
4. 石造物からみた蝦夷地の内国化
5. 松前三湊の墓石と人口動態

### 第Ⅳ章 カラフト（サハリン）島への和人の進出

1. カラフト島出土の日本製品
2. 自主会所跡の位置と構造
3. 死亡者からみたカラフト島への和人の進出
4. 1850年代のカラフト島の先住民族と国家
5. クシュンコタン占拠事件と樺太アイヌ供養・顕彰碑

### 終章 蝦夷地史の構築を目指して

1. 「蝦夷地史」研究の提唱と実践
2. 北方交易と蝦夷地内国化の歴史

序章では本論で論じる蝦夷地の内国化に先立って行われた東北地方の内国化について概略を述べるとともに、北方史やアイヌ史研究の現状を概観し、課題点を洗い出した。

第Ⅰ章「北方交易に関する考古学的研究」では、北海道アイヌの物質文化を特徴づける宝物類に焦点を当てた。彼らが宝物とした漆器や太刀・刀装具、甲冑、ガラス玉は、津軽海峡や宗谷海峡を越え北海道島に運ばれてきた移入品であり、それらを通して北方交易の歴史的変遷を辿った。

第Ⅰ章第1節「アイヌ文化成立以前の北方交易」では、アイヌ文化成立以前の北方交易に関する考古学的痕跡として擦文文化に伴う銅鉦を取り上げ、10世紀から12世紀の北方交易の具体像を述べた。10・11世紀頃に太平洋沿岸域の擦文集団に受容された銅鉦は、毛皮

の献上に対する見返りとして、都の王臣家から下賜された宝物である。12 世紀、日本は中国を中心とする東アジアの巨大な物流機構に組み込まれ、中世世界に汎列島的な商品経済圏が形成されるなか、北方交易においては時代を経る毎に日本海交易の比重が高まっていくが、釧路市材木町 5 遺跡の銅鉤や湖州鏡は、12 世紀代には、外浜に到る奥大道の先に太平洋交易ルートが引き続き機能していたことを示している。

第 I 章第 2 節「考古資料からみたアイヌ文化の成立」では、アイヌの物質文化の特徴から彼らのエスニシティの形成時期とその背景について論じた。アイヌの物質文化を特徴づける、ガラス玉、骨角製狩猟・漁撈具、漆器と蝦夷刀、和産金属製品を転用した装飾品が出揃う 13 世紀末・14 世紀初頭には、既にタマサイ・蝦夷刀・飾り矢筒などが定型化していることから、13 世紀にはアイヌ文化は成立していたとの見方を示した。その上で、コシヤマインの戦い以前の初期アイヌ文化（13～15 世紀前半）には、方形配石茶毘墓、ワイヤー製装身具、小型のトンボ玉・メノウ玉、金属板象嵌技法といった大陸の様相が色濃く認められる点を指摘し、アイヌ文化は基本的には擦文文化をベースとし、13 世紀に始まるサハリン島への北方進出に伴い、アムール河（黒龍江）下流域の女真文化との文化的接触により「化学変化」を起こしたことで生まれたとの仮説を提示した。

第 I 章第 3 節「アイヌの宝物とツクナイ」では、デポ（埋納）された宝物やアイヌが与えた損害や犯した罪に対して宝物をもって賠償する行為、すなわちツクナイ（償い）を通して、アイヌの刀や刀装具について位置づけを行った。和人によって書き留めた古記録類や出土資料を通してアイヌの宝物の頂点に和製の武器・武具やそれを写したものがあり、それらはアイヌ社会の中で、あるいは和人との関わり合いの中で、集団関係を円滑化する機能を持っていたことを確認した。そうした価値観は、出土品からみてアイヌ文化成立期にまで遡る可能性が高く、古記録から 19 世紀に至るまで長く保持され続けたことを指摘した。アイヌの刀類は、彼らの手になる木製あるいは金属板に簡単な加工を加えた刀装具を除き、基本的に和製であり、古くは交易品であったが、時代が下るにつれ贈答儀礼品となり、最終的にはウイマムやオムシャの際の下賜品になったとの見方を示した。また、京で作られた上手の製品を除き、蝦夷刀・蝦夷拵の主たる生産地は、中世には上之国・下之国や津軽・南部といった津軽海峡周辺域で、近世には松前城下と推定した。

第 I 章第 4 節「副葬品からみたアイヌ文化の変容」では、アイヌ墓の副葬品を分析し、民族誌と比較した。アイヌ墓の副葬品は 1667 年に降下した樽前 b 火山灰を境に、その上下で様相が大きく変わる。即ち、副葬品の上位を占める刀子（マキリ）、漆器、太刀・腰刀はいずれも副葬率が急速に低下し、なかでも太刀・腰刀の減少が著しい。樽前 b 火山灰降下以前には日本刀もアイヌ墓に副葬される例が見られたが、降下後にはそうした例は皆無となる。1669 年に起きたシャクシャインの戦いを契機に松前藩によるアイヌの「刀狩り」（武装解除）が行われるとともに、急速に和人による経済的支配が強化されたとの見通しを述べた。

第 I 章第 5 節「シベチャリ出土の遺物」では、これまで未報告のままとなってきたシャクシャインの本拠地シベチャリチャシ周辺から出土した遺物を検討し、シャクシャインの戦い以前の日高アイヌが豊富な日本製品を保持する環境にあったことを示した。

第 I 章第 6 節「タマサイ・ガラス玉に関する基礎的研究」では、アイヌのガラス玉に関して、出土品と伝世品の型式学的検討を通して編年を行い、和人の蝦夷地進出がアイヌのタマサイを華美なものとし、形式化を促進した可能性を指摘した。

第 II 章「本州アイヌの実像」では、これまで文献史料をもとに語られてきた本州アイヌについて、青森県内の出土資料を提示し、資史料の突合せにより、その実像に迫った。

第 II 章第 1 節「考古学的痕跡」では、青森県内の中近世遺跡から出土した骨角器・ガラス玉・蝦夷拵の刀装具類を取り上げ、本州アイヌの生業（海獣猟・熊猟）や習俗（狹装束）を明らかにした。

第 II 章第 2 節「生業・習俗と北奥社会」では、本州アイヌの考古学的痕跡と文献史料の対比を通して、本州アイヌの生業や習俗の変遷を検討した。雑穀栽培や海運・交通活動とならんで本州アイヌの重要な生業であった漁撈は、中近世をとおして海獣猟、鮫漁、鮑漁が盛んで、海獣猟や熊猟に使う道具は、基本的に北海道アイヌのものと共通する。その生

業からみて彼らの居住地は海沿いにあったと考えられるが、内陸の戦国城館跡からも彼らの存在を示すガラス玉や骨角器、木製の中柄などが出土する。既に和人経済の枠組みの中に組み込まれていたとはいえ、中世の段階では領主と本州アイヌはまだ支配―被支配の関係にはなく、寛文蝦夷蜂起を契機として政治的・経済的支配関係が確立したと推測した。

第Ⅱ章第 3 節「狩猟と漁撈」では、彼らのアワビ漁・海獣猟・熊猟について述べるとともに、狩猟・漁撈具の比較を通して、下北に住む本州アイヌが北海道島日本海側のアイヌと技術基盤を共有していたことを実証した。また、アワビの貝塚の分布から、和人の蝦夷地への進出拡大により「アワビの道」が日本海沿いに次第に北上し、17 世紀には渡島半島の付け根付近に、その後 18 世紀には積丹半島周辺に到達、最終的には道北礼文島にまで及んだことを明らかにした。

第Ⅲ章「和人の北方進出と蝦夷地の内国化」では、北海道島でみられる和人館・陶磁器・墓石などの石造物の分析から、津軽海峡を越えた和人の経済的・宗教的・政治的進出状況を明らかにし、それをもとに蝦夷地が内国化されていく過程について述べた。

第Ⅲ章第 1 節「道南和人館とその時代」では、筆者が科学研究費で行った北海道北斗市矢不来館跡の学術発掘調査に基づき、渡島半島の和人館には茶道具や仏具に彩られた「中世的世界」が展開していたと論じた。さらに北海道渡島半島の中世城館跡に焦点を当て、館跡の曲輪配置と規模を比較するなかで、これまで上之国の蠣崎氏に比べ研究が手薄であった下之国安東氏を取り上げ、道南の戦国的様相を述べた。渡島半島に所在する中世城館のなかでは松前大館と茂別館が規模・構造ともに抜きん出ているが、長禄元年（1457）のコシヤマインの戦い直後、この蜂起をかりうじて乗り越えた花沢館の蠣崎氏と茂別館の下国安東氏は、アイヌからの攻撃に備えて高地により防御性の高い城館を構築する必要性に迫られ、蠣崎氏は勝山館を、下国安東氏は矢不来館を築いたと推察した。矢不来館の規模と出土品から、下国安東氏は、コシヤマインの戦いを経た 15 世紀後半の段階でなお將軍足利義政やその側近たる同朋衆の好みを反映した書院会所の唐物数寄を理解し、政治的・経済的・文化的にそれを受容する立場にあり、上之国の蠣崎氏を上回る勢力を保持していた可能性が高いことが判明した。コシヤマインの戦いの後、松前の地位は相対的に下がり、蠣崎氏と下国安東氏の勢力がせめぎ合う、上之国対下之国の構図がより鮮明になったと考えた。そうした構図は、東部アイヌが武装蜂起し、宇須岸（箱館）・志濃里・与倉前の三館が陥落したとされる永正 9 年（1512）を境に大きく変化し、矢不来館もこの時に焼失・廃絶した可能性が高い。この事件をきっかけに、下国安東氏の勢力は大幅に低下し、16 世紀前半には蠣崎氏（2 世蠣崎光廣）が道南の和人勢力の頂点に立つことになったと推測した。

第Ⅲ章第 2 節「北海道島における中世陶磁器の流通」では、北海道内から出土した中世陶磁器の集成に基づき、陶磁器流通の時期的変遷を明らかにするとともに、出土陶磁器により矢不来館跡の存続年代を確定した。北海道厚真町宇隆 1 遺跡から発見された常滑焼第 2 型式の壺は、12 世紀代に北海道島に渡った和人の存在を物語る。13～15 世紀前半には日本海側のヨイチが大陸や本州との交易の拠点として重要な位置を占めていた。余市町大川遺跡から出土した中世陶磁器の在り方からみて、ヨイチは十三湊と直結しており、和人の居住も想定される交易場であった。十三湊の終焉とともに北方交易の拠点はヨイチからセタナイに移る。セタナイは直接的には上之国・松前・下之国といった道南の和人拠点との限定された交易場であったと思われる。道央の二風谷周辺や道東のチャシ跡からは 16 世紀代の陶磁器が出土しており、16 世紀には和人とアイヌの交易が活発化したと考えた。

第Ⅲ章第 3 節「近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化」では、北海道内から出土した近世陶磁器の集成に基づき、陶磁器流通の時期的変遷を明らかにし、北海道以北への和人の進出と、和人とアイヌとの関係について通時的に論じた。蝦夷地における近世陶磁器の出土量は、19 世紀前半まで一貫して「西高東低」で推移する。出土陶磁器の分析を通して、経済的・習俗的に内国化が進む時期は、東西蝦夷地で異なり、西蝦夷地において早く進行することや、東蝦夷地においては、シャクシャインの戦いやクナシリ・メナシの戦いといった和人とアイヌ民族との抗争が、物資の流通にも大きく影響していることが確かめられた。西蝦夷地では、海産物を求める和人の進出が移住をとまなう形で進み、それに連動して主たる交易場がセタナイ（17 世紀）からヨイチ（18 世紀以降）へと変化する。一方、東蝦夷

地では、18 世紀末以前には和人が移住した形跡はほとんど認められず、和人の本格的な進出は、ロシアと幕府との間で国境を巡る問題が顕在化する 19 世紀代に入る。西蝦夷地への和人の進出が主として経済的理由によるのに対して、東蝦夷地への和人の進出は政治的色彩が濃いと考えられる。蝦夷地で陶磁器流通の「東西格差」が解消するのは、北海道島から出土する陶磁器が爆発的に増大し、流通範囲も拡大する 19 世紀中葉である。19 世紀には主体を占めるのは、筆者が「幕末蝦夷地 3 点セット」と呼んだ徳利・中甕・膾皿である。このうち徳利と中甕は本来的には北前船で酒や味噌・塩を運ぶ際の容器であり、肥前系磁器の膾皿は労働者の食事に相応しい碗と皿の両方の機能を兼ね備えた便利で安価な食器であった。それらは、本州から労働者として移住してきた和人とともに、漁場などで和人に混じり半ば強制的に働かされていたアイヌの人々も使用していたと考えられる。「幕末蝦夷地 3 点セット」は、結果的にアイヌの伝統的な食文化にも多大な影響を与え、和人への同化を促進させたと推察した。窯業技術が拡散する 19 世紀の陶磁器は、産地同定が困難なものが多いが、本論文では上野・高取系の甕を特定し、それらが日本海交易により「幕末蝦夷地 3 点セット」のひとつとして、内国化の進む蝦夷地全域へ多量に搬入されていることを明らかにした。

第Ⅲ章第 4 節「石造物からみた蝦夷地の内国化」では、北海道内の近世石造物の悉皆調査に基づき、和人の北海道島進出の実態を明らかにし、蝦夷地が経済的・文化的・政治的に内国化される過程を論じた。近世石造物の在り方は、西蝦夷地と東蝦夷地で大きく異なっており、西蝦夷地では社寺奉納物が多く、場所によっては 18 世紀代から建立されているのに対して、東蝦夷地では墓標は多いものの社寺奉納物は少なく、18 世紀代に遡るものは極めて稀である。また、東蝦夷地では和人地に近い地域から順次東へと石造物の造立地域が拡大するのに対して、西蝦夷地では和人地との距離に関係なく地域ごとに石造物の造立時期が異なる現象がみられた。こうした現象は、東蝦夷地への和人の進出が主として 18 世紀末以降の対ロシア政策に伴う政治的理由によるものであるのに対して、西蝦夷地はそれ以前から漁場の開発が活発で、場所請負関係者の出入りが頻繁であったために生じたと考えられた。石造物から見る限り、東蝦夷地への民間人の進出が活発化するのには、1830 年代以降とみられる。松前・西蝦夷地の幕領化に先行し東蝦夷地の直轄地化が急がれたのは、西蝦夷地が既に和人の経済的・文化的進出により実質的に内国化された状態であったのに対して、東蝦夷地は未だ和人の進出が遅れており、ロシアの南下政策の前に短期間で内国化を実現するには、政治的手法しなかったためと推測した。蝦夷地の政治的内国化については、墓標の分析を通して、1800 年代と 1860 年代に大きく進展しており、東蝦夷地は幕府（箱館奉行所）主導で、西蝦夷地は幕府の命を受けた東北諸藩が大きな役割を果たしたと推測した。

第Ⅲ章第 5 節「松前三湊の墓石と人口動態」では、筆者が科学研究費により行った松前・江差・箱館の近世墓標の悉皆調査と歴史人口史料の検討から人口変遷を導き出し、松前三湊の盛衰を論じた。松前は梁川移封による人口減少を挟みながらも江戸時代を通して緩やかに増加し、1850 年代のピークを境に幕末に減少傾向に転じるのに対し、箱館は 19 世紀に入り短期間で急激に人口が増加する。墓標を保有する人の割合は松前のほうが高かったことから、箱館と松前では住人の階層性に違いがあったということが裏付けられた。

第Ⅳ章「カラフト（サハリン）島への和人の進出」は、考古資料と文献史料を併用し、カラフト（サハリン）島における日本製品の流通と、宗谷海峡を越えたカラフト（サハリン）島への和人の進出について論じた。このうち第 1 節と第 2 節は、筆者の科学研究費による研究プロジェクトの一環として弘前大学とサハリン大学考古学・民族誌研究所ならびにサハリン州立郷土誌博物館の研究協力協定により実現したサハリンでの調査成果である。

第Ⅳ章第 1 節「カラフト島出土の日本製品」では、サハリン大学とサハリン州立郷土誌博物館の所蔵資料から、カラフト（サハリン）島出土の日本製品を抽出・資料化し、日本製品の樺太アイヌやニブフへの受容状況を明らかにした。サハリンから出土する江戸時代につくられた日本製品は、キセル・刀装具・漆器・鉄鍋・銭（寛永通寶）が確認される一方、陶磁器類はほとんどみられない。また、キセル・刀装具・鉄鍋がサハリン島の北部からも出土するのに対して、漆器はサハリン島の南部からしか発見されない。このことは、

日本製のキセル・刀装具・鉄鍋が樺太アイヌのみならずサハリン北部に住むニブフの手に渡っているのに対して、漆器はサハリン南部の樺太アイヌにしか受容されなかったことを意味する。サハリン島から出土した漆器は、漆碗・耳盥・行器で、全てアイヌの酒儀礼に関する道具である。サハリン南部から出土したこれらの漆器から、樺太アイヌもまた、18世紀以前から北海道アイヌと同じく日本産の漆器を使った酒儀礼を行っていたことが判明した。

第Ⅳ章第2節「自主会所跡の位置と構造」は、カラフト（サハリン）島における日本支配の拠点であった自主会所跡の現地調査報告である。自主会所は一部石垣を伴う土塁を廻らすなどロシアとの武力衝突を念頭においた軍事拠点であるとともに、日本式の庭園を備え、幕府役人の接待やオムシャなど各種の儀礼を行うにふさわしい施設であったと指摘した。

第Ⅳ章第3節「死亡者からみたカラフト島への和人の進出」は、北海道立文書館所蔵の「自主村墓所并死亡人取調書上」に基づき、江戸時代のカラフト（サハリン）島への和人の進出状況を論じるとともに、樺太・千島交換条約の締結に先立ち、島内10箇所に整備された招魂所や墓所についても検討した。カラフト（サハリン）島で死亡した和人は、文化年間の樺太警備に従事した久春古丹の会津藩関係者や自主勤番役人が最も古く、復領後の松前藩が積極的に樺太の漁場開発に乗り出した1820年代になって自主や久春古丹で民間人がみられるようになる。1840年代には新たに西海岸北緯47度付近の西富間（真岡）で、1850年代には同じく北緯48度付近の楠苗（久春内）で死者が記録されるようになるとともに、全体的に死者数が急増する。1860年代には、新たにアニワ湾沿岸のリヤトマリ（利家泊）、西海岸の西白濱・鶴城、東海岸の東富内（富内茶）、オチヨホカ（落帆）、榮濱でも死亡者が加わり、死者数が増加している。慶應4年（1868）以前に樺太で死亡した和人の約6割は民間人で、出身地別では南部下北が最も多く、松前がこれに次ぐ。

第Ⅳ章第4節「1850年代のカラフト島の先住民族と国家」は、目賀田帯刀の「北海道歴検図」の分析を中心に、領有をめぐる日露間の政治的交渉が進行していた1850年代のカラフト（サハリン）島に焦点を当て、樺太アイヌやニブフなどの先住民族の居住状況と日本・ロシアの進出状況について論述した。カラフト（サハリン）島の領有について、日本はロシアに対し、古来より朝貢関係により支配下にあるアイヌ民族の居住地は日本の領土であるとの前近代的な領土観に基づく主張を繰り返す一方、北緯48度以南の西海岸やアニワ湾沿岸の漁場を急速に拡大するとともに、安政5年（1859）には越前大野藩に樺太開発の許可を与え、北緯48度から49度付近のライチシカからホロコタンの間に移民を図るなど、ロシア同様、帝国主義的植民政策を開始した。北緯50度以南の樺太南半に住んでいた樺太アイヌは、和人による漁場設定に伴い労働力として集住させられ、アイヌ民族は自国民であるとの近世国家の論理によって支配されることになった。

第Ⅳ章第5節「クシュンコタン占拠事件と樺太アイヌ供養・顕彰碑」は、筆者が科学研究費により行った北海道松前町における近世墓標調査の過程で発見した樺太アイヌ供養・顕彰碑を吟味し、この石碑が建つ契機となった嘉永6年（1853）のロシアによるカラフト（サハリン）島クシュンコタン（旧大泊、現コルサコフ）占拠事件をめぐる樺太アイヌと近世国家の社会的関係を論じた。北方史において重要な位置を占めるこの石碑は、クシュンコタン占拠事件に際して、日本側に御味方した樺太アイヌを顕彰するため、占拠事件当時、カラフト場所請負人・伊達林右衛門、栖原六右衛門配下の現地支配人兼「山丹蝦夷通詞」としてロシア側との交渉に当たり、その功績により嘉永7年に松前藩士、さらに安政3年（1856）に幕臣に登用された清水平三郎が、安政3年5・6月以降、翌4年6月を下限とする時期にクシュンコタンに建立したものである。当時、カラフト南部のアイヌ社会には場所請負制下での強制的な雇用労働や交易制限が浸透し、和人社会への経済的従属性が強まりつつあった。この石碑は近世国家側からみれば、カラフト南部のアイヌ社会がその統治下にあり、異民族との関係が良好なものであるということを視覚的に示す役割を果たしたと論じた。

終章では、従来のアイヌ史や日本史の枠にとらわれない「蝦夷地史」研究の必要性和研究方法について述べ、本論文が蝦夷地史研究の実践例としていかなる位置を占めるかにつ

いて説明した。また、本研究により明らかとなった蝦夷地史のアウトラインについて記述し、蝦夷地の歴史を、コシヤマインの戦い以前の初期アイヌ文化期（13～15 世紀前半）、和人の北海道島進出により島の南西端に和人地が設定され、蝦夷地と内地との経済的関係性が強まった中期アイヌ文化期（15 世紀後半～17 世紀後葉）、シャクシャインの戦い以降、蝦夷地が日本国内経済圏に組み込まれた後期アイヌ文化期（17 世紀末葉～18 世紀末葉）、クナシリ・メナシの戦いや文化 3・4 年のロシア艦による襲撃事件を経て蝦夷地の内国化とアイヌ民族に対する国民化政策が進められた段階（19 世紀初頭以降）に区分する案を示した。